慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本橋橘町商業史覚書：問屋と街
Sub Title	Historical Study of Commerce of Downtown in Tokyo, Case of Tachibana-cho, Nihonbashi
Author	白石, 孝(Shiraishi, Takashi)
Publisher	
Publication year	1999
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.41, No.6 (1999. 2) ,p.65-
JaLC DOI	
Abstract	本稿は日本橋界隈の問屋と街の史的研究の一環として,これまで本誌に発表してきた町々に続く「江戸・明治の橘町商業史」である。橘町はその起立から他の町々と異なっていた。そこでまず,この起立,町名と深い係わりを持つ西本願寺別院-浅草御堂について記し,更に起立後の橘町の商業や町の姿を特徴づけた背景を探り,浜町堀と町との関係,特にその西岸の「元浜町」と橘町1・2丁目,また町の北側の「横山町」と橘町3・4丁目との係りあいをみて,橘町というものが,この2つの商業圏の変化のもとで,同じ町内でも,1・2丁目と3・4丁目とがい
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19990200-00685974

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第41巻第6号
1999年 2 月

1998年11月18日掲載承認

日本橋橘町商業史覚書

——問屋と街——

白 石 孝

<要 約>

本稿は日本橋界隈の問屋と街の史的研究の一環として，これまで本誌に発表してきた町々に続く「江戸・明治の橘町商業史」である。

橘町はその起立から他の町々と異なっていた。そこでまず，この起立，町名と深い係わりを持つ西本願寺別院——浅草御堂について記し，更に起立後の橘町の商業や町の姿を特徴づけた背景を探り，浜町堀と町との関係，特にその西岸の「元浜町」と橘町１・２丁目，また町の北側の「横山町」と橘町３・４丁目との係りあいをみて，橘町というものが，この２つの商業圏の変化のもとで，同じ町内でも，１・２丁目と３・４丁目とがいかに異質な町になっていったかをみる。いわば，町を商業史的に周囲とどのように関係しあっているか，更に町の商業的発展がその町の姿をどう変えてゆくか，などを立体的に描く試みである。

<キーワード>

西本願寺別院，浅草御堂，江戸海辺御坊，江戸浜町御坊，武州豊嶋郡江戸庄図，松平越前守屋敷，谷之御蔵，立花町，本町通り，浜町堀，竹河岸，東緑河岸，汐見橋，千鳥橋，２つの商業圏，地価，紫橋，元浜町，花町，木綿呉服問屋，新大坂町，馬喰町・横山町界隈，大伝馬町，通旅籠町，小間物諸色問屋，明治の火災，維新不況，織物問屋街化，舶来品黄金時代，西洋小間物，日用雑貨問屋街，町内異質化

はしがき

日本橋界隈の町々は，それぞれ歴史的に多くの特色をもっている。これまで筆者が本誌に記してきた新乗物町，新材木町，堀江町・小舟町の商業史覚書—問屋と街—はいずれもこの特色を中心としてきたものにほかならない。[1] 今回もまた同様の視点で日本橋橘町をとりあげるものである。

橘町は今日では「東日本橋三丁目」となっている江戸時代から独特の歴史をもつ町であった。しかし，奇妙なのは，この町のすぐ北側の横山町や馬喰町は今でも旧名のままであるのに，この橘町

1) 白石孝『日本橋新乗物町史覚書』(三田商学研究第40巻第４号)，同『日本橋新材木町商業史覚書』(三田商学研究第40巻第５号)，同『日本橋堀江町・小舟町商業史覚書』(三田商学研究第41巻第２号)。

やその東側に連なる若松町，薬研堀町，矢の倉町，米沢町，吉川町などは，全部その名を失い「東日本橋」となってしまったことである。したがって，今日では「橘町」といっても知る人も少なくなったが，実はこのこと自体に，この町の史的特徴がよく現われているといえる。本稿はそこで，この町の起立から考えてゆき，江戸時代はどんな町であったか，これが明治期にどのように変貌していったかを史的に追跡して，この町が浜町堀以西の商業圏と横山町界隈のそれとに大きく影響された2つの異質な地域から成りたっていたことを明らかにする。

この町をここに取りあげた理由は，これまで扱ってきた町々とは，かなり違った史的背景をもつものであり，またこの種の記述も稀有といってよいからである。この町のすぐ眼の前の馬喰町や横山町については，文献的にも様々なものがあるし，その町会史[2]にもかなり詳しく記されているにもかかわらず，この橘町は日本橋区史でも簡単にしか扱われていないし，町会史すらも見当たらない。それ故に，本稿がこの日本橋界隈の問屋と街という史的研究の隙間を少しでも埋めることができ，また商業史の分析手法に新たな視点を提供できればと考えている。

1．浅草御堂と橘町の起立

日本橋界隈の多くの町が江戸城下町として早くから造られたのに対し，橘町が起立したのは天和3年（1683年）頃であった。このあたりは万治元年（1658年）からの松平越前守（福井藩）屋敷で，またそれ以前は，西本願寺別院・浅草御堂のあったところである。橘町という町名のいわれも，この辺に寺院門前で立花を売っていた店があったからだといわれる[3]。そこで，まずこの町と因縁が深い西本願寺別院の創立からみておきたいと思う。

この創立については，東京市史稿によると，元和7年（1621年）3月，浅草浜町に創しとあり，場所は横山町2丁目南側町屋の裏となっている。しかし「新修・築地別院史」になると[4]，さすが詳しく，この寺地を入手したのは慶長12年（1607年）としているから，まだ江戸市街地造成の最中で，「祖門旧事紀」によって「初めは浜町（今地よりは若干町の北）と云処にあり」というから，まだここは土地そのものが造成されつつあったといえる。それ故に，このあたりは「浅草御門内」という意味あいだけでなく，文字通りの「浅草」の「浜」，俗称「浅草浜町」だったのではなかろうか。また堂舎の落成も元和3年説もあり，元和7年かどうか検し得ないらしい。

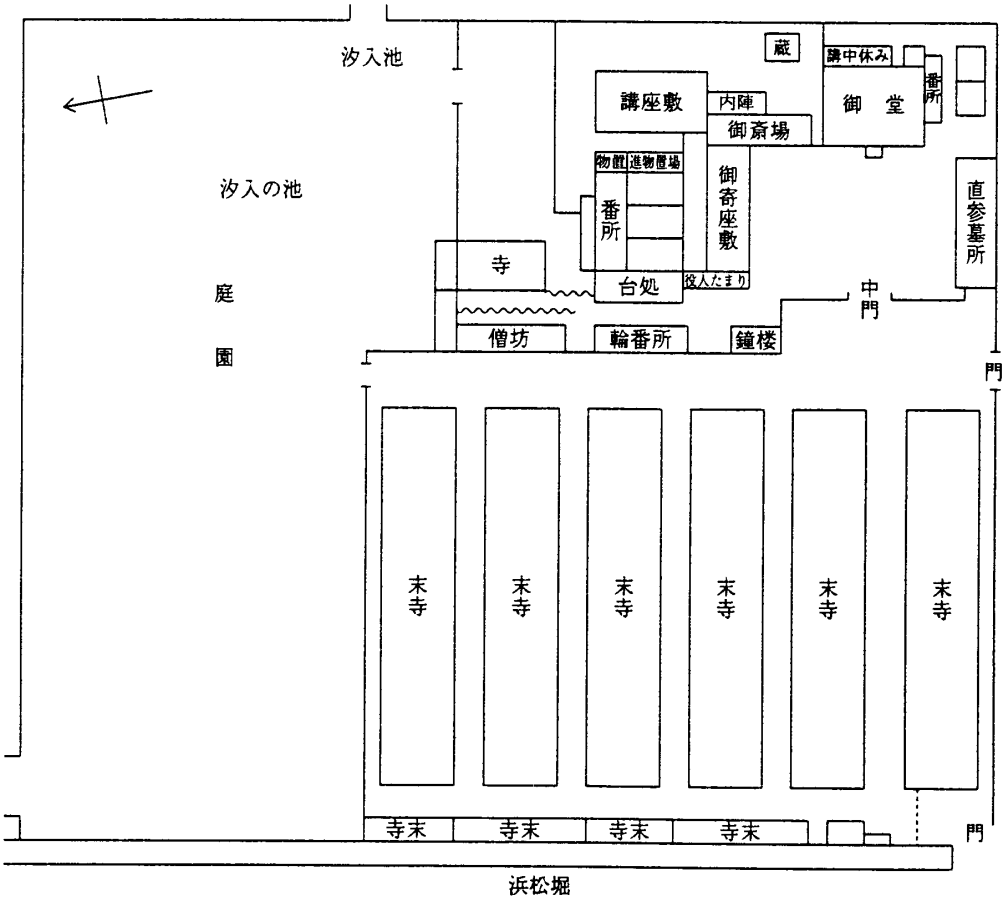
この堂舎は「浅草御堂」という。まだその頃は「西本願寺別院」ではない。これが別院として幕府が公認したのは寛永2年（1625年）のことであったからである。もっとも「本願寺通紀」に「江戸

2）有賀緑郎編『日本橋横山町馬喰町史』横山町馬喰町問屋連盟刊，昭和27年。
3）たとえば東京市編『東京案内』（上），東京市，明治40年，p.572。
4）『新修・築地別院史』本願寺築地別院，昭和60年，pp.145-147。

浜町に別院を創す」とあるが，これはあくまで西本願寺内の扱いで，公式には「浅草御堂」といい，その場所柄から「江戸海辺御坊」とか「浜町御坊」と称せられもし，御堂・対面所・台所・輪番所・太鼓堂・鐘楼・大門・中門及び子院が次第に整っていった。「新修・築地別院史」によると，子院28所寺のうち18所寺が御坊の側に，10所寺が東側，8所寺が西側に位置していたという。

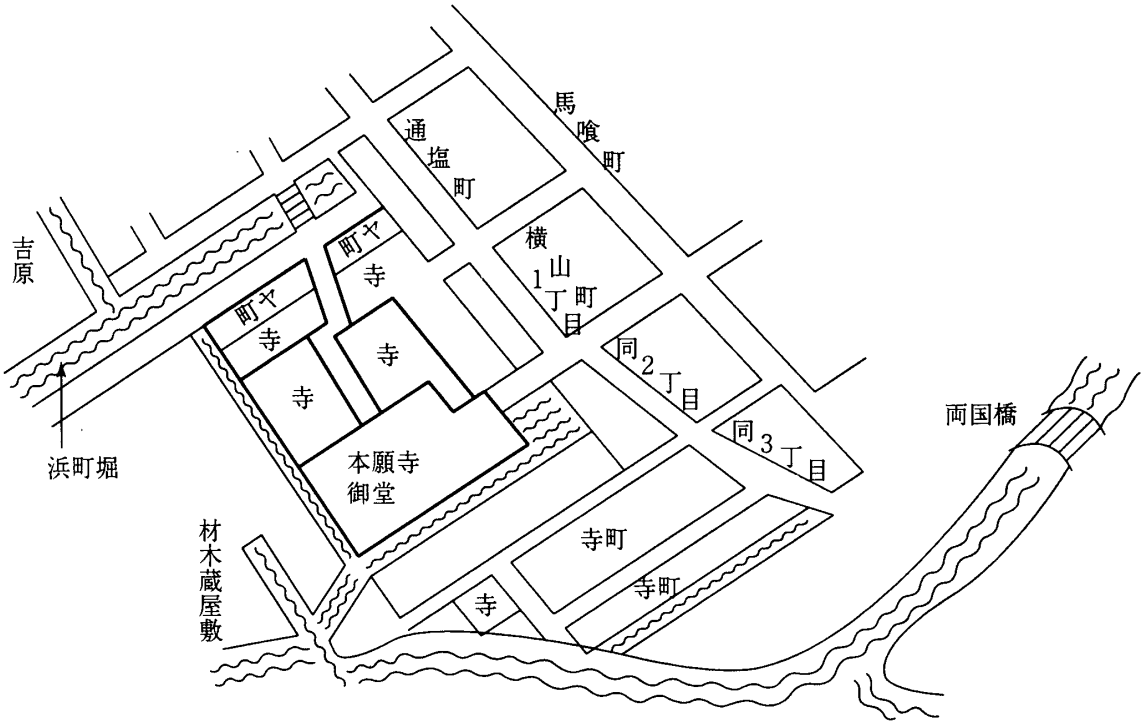
それではこの御坊はどんな境内をつくっていたのであろうか。実はこれについて確たる図がない。元築地にあり越谷に移った法光寺に「浅草御堂創建平面図」というのがあるが，公にされているものとしては，わずかに「東京名所図会[5]」の「江戸浜町御坊正図」しか見当たらない。これはこの別院に9代奉仕した虎の間詰正木新吾翁の所蔵の古図によるもので，総門内に57宇の末寺が横に線状に並列して，中門内に入ると，右に58坪の直参墓所，左に鐘楼，輪番所，御寄座敷などや幾棟の僧坊があって，本堂は正面に位置し，間口12間，奥行8間，左に廻廊を通じ御斎場，講座敷などが連なり，また広大な庭園をもち，汐入の池があり，船を繋ぐとある。図1－1はこの図の主要なものを模写したもので，ほぼ境内の模様をうかがうことができよう。もっとも，この図が実際に正

図1－1　江戸浜町御坊正図（東京名所図会）



5）『新撰東京名所図会』京橋区三部，風俗画報，東陽堂，明治34年，p.89。

図1－2　西本願寺「江戸海辺御坊」（寛永）
（武州豊嶋郡江戸庄図より）



図であるかは確かめられない。それにこれには周囲の地理的関係が描かれていないので，この浅草御坊の載っている江戸図をここに改めてかかげておきたい。図1－2は武州豊嶋郡江戸庄図（寛永）よりこのあたりを抽出したものである。これをみれば，御堂が「海辺御坊」とよばれた意味がよくわかるように思う。当時はこのように御堂の横に大川の河口から堀が入っていて，まさに「海辺」といってよい地形であった。前の図1－1の「浜町御坊正図」にみる庭園の汐入の池もこの堀から直接ひかれたものであろう。ただ全体の形，特に境内での道が「正図」とこの図では異なるのが気になるが，これによって横山町2丁目南側町屋の裏という浅草御堂の場所も明らかに示されたことになる。その上，図1－2に境内と浜町堀との間にわずかに小さい町屋が記されているのがみえる。まさに門前の町屋で，もし立花を売る店があるとすれば，ここではないかと推測できないこともない。

しかし，創立から40余年，明暦3年（1657年）1月に江戸に大火があって東西両本願寺は焼失し，東本願寺の方は神田から浅草三十三間堂芝地に移されるが，これに対して，西本願寺は八丁堀築地「海涯」[6]に移されたのであった。そこは「海湾洲渚の地」[7]で，佃島の門徒や信者などが土砂を運び海を埋めて造成し，新たな御堂を建設する。築地別院の造営である。

明暦の大火による寺院の移転後，寺地は収公され，西本願寺・浅草御堂の跡は，准如と結びつき

6）『徳川実記』第4篇，厳有院殿御実記巻13，（図史大系第41巻，吉川弘文館，昭和6年）p.226。
7）前掲『新撰東京名所図会』p.80。

の強い福井藩の松平越前守が，同年５月14日に屋敷を下賜される。[8] 坪数１万3000坪とある。[9] これを期に，この周辺はしだいにその姿を変えていった。松平越前守屋敷の東側に，法体の幕府役人の土地で，町人に貸すことにより実質的に町地となった「童坊町」（同朋町）が生まれ，浅草御堂の裏手に引き込まれていた堀が薬研堀となって，この一帯の「谷之御蔵」の下まで船がつくようになり，このあたりに，旗本・家人が給与米を受取る米蔵が設けられた。[10] また屋敷の南は小さな町，村松町があって，その更に南には武家屋敷が続く。これについては脚注10の「中央区沿革図集」の延宝年中之形の図をみてほしい。

この辺が更に大変化をみせるのは天和から元禄にかけてであった。天和に入り，松平越前守屋敷は上げ地となり，天和３年町地となる。これが橘町の起立である。図１－３のように東西南北の４辻の町地で，当初は立花町と称したという。[11] それは既に述べたように，浅草御堂のあった頃，門前で立花を売る店が多かったことによるといわれる。これが橘町のゆえんだが，果たしてそうであったかどうかはわからない。むしろ，同じ浅草御堂との係わりあいから来るとすれば，本願寺で毎年７月７日に立花会という法会修行があり，報恩講といっていたことから，[12] あるいは「立花」という町名がよばれるようになったとも思えるがいかがであろうか。

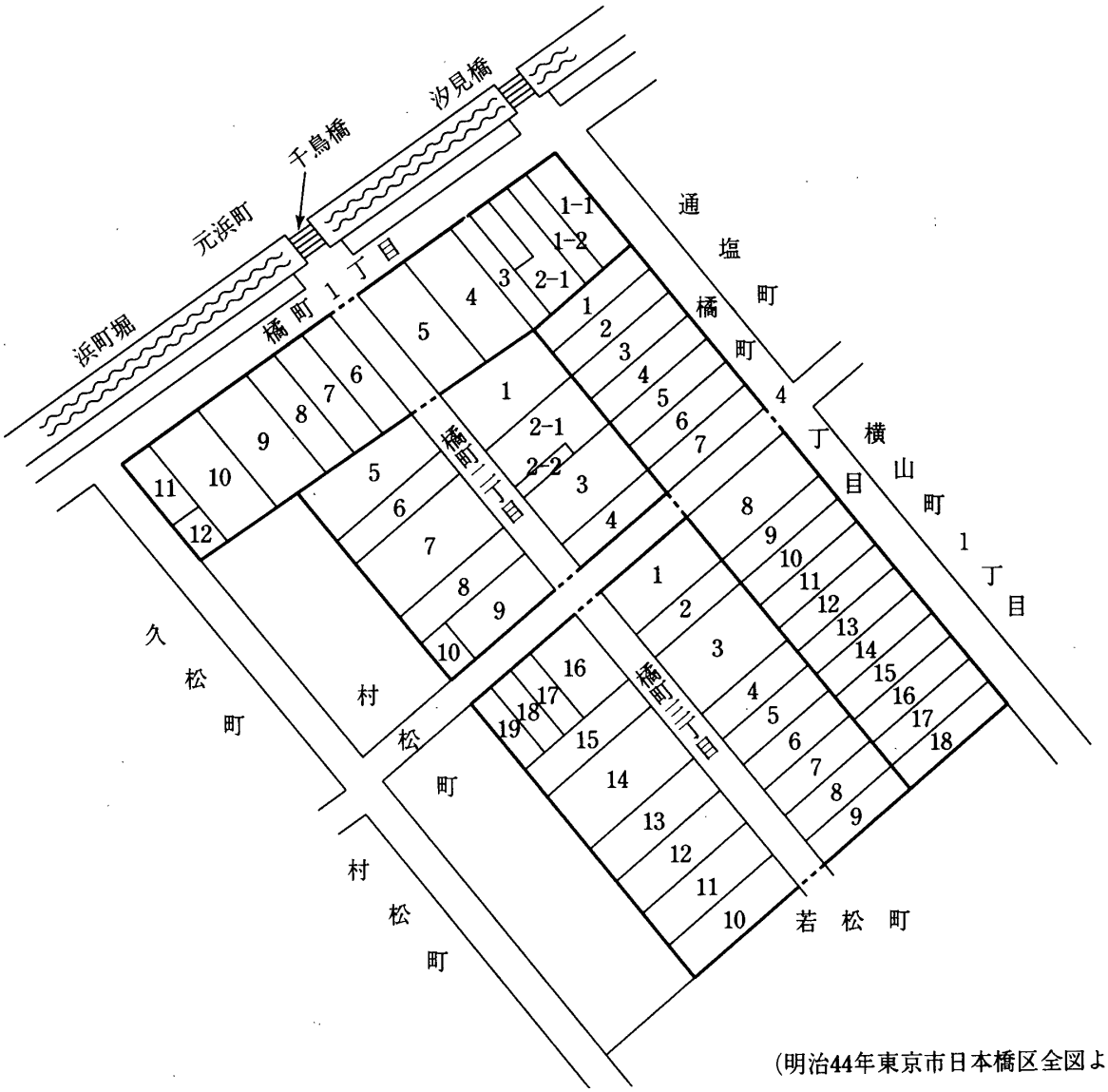
かくして起立した橘町を考える場合，この周辺の大きな変化を視野に入れなくてはなるまい。まず「谷之御蔵」が元禄10年（1697年）に取払われて築地小田原町に移転し，薬研堀をはさんで武家屋敷となり，その先の両国広小路に出るあたりに吉川町が起立し，また元禄12年には米沢町１丁目が生まれ，徐々に橘町の周辺は町屋が多くなってゆくのであった。しかし，なんといっても，橘町にとって重要な事柄は，浜町堀がそれまでこの町の半ば位しかなかったものが，元禄には，その先に伸び，千鳥橋や汐見橋により西側の元浜町と結ばれ，またこの水路を利用することができるようになったことである。しかし，まだ橘町の東には武家屋敷があり，薬研堀があったし，南には村松町のほか久松町，若松町が起立していたが，まだ小さな町地で，その殆どが武家屋敷であった。薬研堀が埋立てられ町地になっていったのは明和以降である。

２．江戸時代の橘町史――特徴と背景――

江戸時代の橘町の商業や町の姿を特徴づけるものとして，次の３つの背景をまず指摘しておきたいと思う。

8）『御府内備考』第１巻，雄山閣，昭和45年，p.13。
9）窪田吾郎『浜町，年表とその成立』自版，平成８年。
10）『中央区沿革図集（日本橋篇）』中央区立京橋図書館，平成７年，p.30。
11）前掲『東京案内』（上）p.572。
12）『江戸名所図会』巻之一，ちくま学芸文庫版，平成８年，p.206。

図1－3　江戸・明治期の橋町地番



(明治44年東京市日本橋区全図より)

第1は，すでに述べたきたように，江戸中期近くまで，ここは江戸西本願寺別院の広大な境内であり，その後，松平越前守という大名屋敷となったという点で，日本橋の多くの町々のように，古くから江戸の経済発展を担い，かつ各種の商業がその町に自律的に集積して繁栄をたどるといった歴史を持たなかったということである。別の言い方をすれば，橋町は馬喰町や横山町のような伝統のある町からすれば，これといった商業の史的バックボーンを持っていない，いわば「新地」のような存在ではなかったか。起立前に寺院があったとき，立花を売っていた店が多くあったとされても，図において，町地がごく僅か記載されている程度で，到底，「門前市」のよう形のものではない。また天和3年に起立してからも，東も南も武家屋敷に囲まれた一画であった。これに対して，元禄時代に起立した米沢町は，大川から入堀された薬研堀という水路が利用できた上に，盛り場の両国広小路に接する点で同じ後発の町であっても，橋町よりは，はるかに商業的背景を持っていた

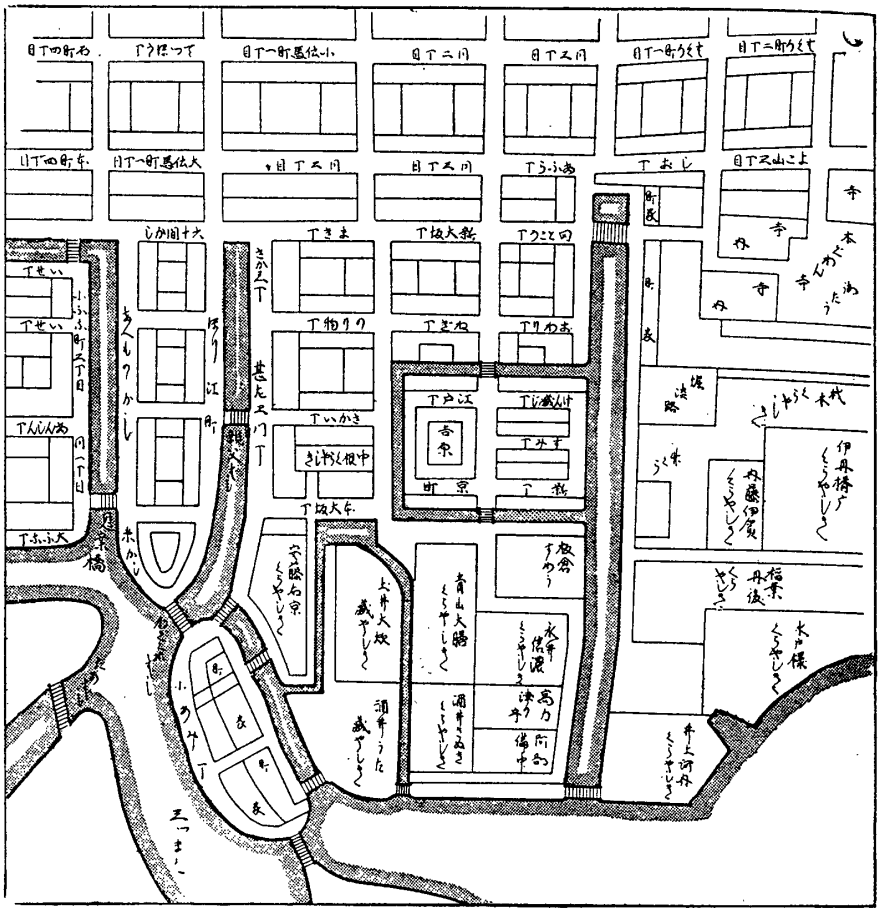
といえる。吉川町にしても，大川端の町であり，浅草橋御門内の殷賑を極めた場所の中にあったからである。これら一帯の町の起立から，どのようにこの界隈が町地として変わっていったかは，「日本橋区史参考畫帖」[13]の延宝，天和，貞享，宝永，明和と各時代毎の図でみることができる。

第2は，馬喰町が本石町通りに，横山町が本町通りという江戸のいわば幹線道路に，それぞれ接しているのと違い，橘町は本町通りの1本南裏の道に面していたことである。殊に，本町通りといえば，周知のように，江戸と奥州・水戸・千葉街道を結ぶ江戸城下町の造成のときから造られた古くからの道筋で，人々の往来繁く，賑やかな街並みであった。この道に沿う町は，本町3・4丁目，大伝馬町1・2丁目，通旅籠町，通油町，通塩町，そして横山町1・2・3丁目であった。これに対して，橘町の方は，堀留町1・2丁目，田所町，新大坂町，元浜町を結ぶ本通りからすれば横道のような道筋に接しているにすぎなかった。まさに，橘町は横山町とは，商業上のロケーションで格段の差があったということができる。

第3は橘町の西側にあった浜町堀の機能と変化である。すでに多くの人々が指摘しているように，江戸は川筋・堀筋が湊の内港のような役割をもっていたが，大川から箱崎川に入る途中の川口橋から北折して開削された浜町堀もその1つではあった。しかし，図1―2のように寛永の頃は，まだ西本願寺のあったあたりまでしか通っておらず，武州豊嶋郡江戸庄図をみると，この堀は寺院の手前から遊廓吉原をぐるっと囲むように造られており，その上，東側は浜町武家屋敷地であった。もっとも図1―2では浜町堀のこうした姿は描いてないので，改めて，図2―1をかかげておこう。これは，同様の図の模写で，寛永時に川や堀が町人地に引き入れられ，江戸湊の内港の役割を果たしていたかをよく示していると思う。これらをみると，この頃の浜町堀は，他の堀と違って真に町家の水運に供するためのものではなかったといえる。しかし，この吉原も明暦の大火で焼失し，浅草に移転させられ，町地になって，囲いの堀も埋められた。浜町堀自体も，元禄に入ってから更に北に向かって開削されて，龍閑川と鍵形に結ばれるに至る。こうなると，この堀の価値は大きく変わり，小舟による水運が盛んに利用されるようになっていった。橘町あたりの堀には汐見橋や千鳥橋がかかり，この一帯は「河岸」に変わっていった。北の竹森橋から南の栄橋まで，「竹河岸」とよばれていたようである。[14]明治には，この堀の東側を「東緑河岸」西側を「西緑河岸」と称したように，長くこの堀は荷の積み降しに賑わったとみられる。もっとも，この堀は汐見橋あたりまで海から汐が差しのぼってくるものの，人家の汚水の吐け口でもあり，土砂や芥で埋まり，川浚いをしないと舟の運行は満ち潮のときでないと困難であったらしい。[15]しかし，この堀が龍閑川と結ばれ，汐見橋や千鳥橋が架けられたことにより，橘町の商業活動に大きな変化が生じたことは推測

13) 日本橋区役所編纂『日本橋区史参考畫帖』日本橋区役所，大正5年。
14) 綿谷雪『考証江戸切絵図』三樹書房，昭和51年，p.198。
15) 東京市役所『東京市史稿』(霸都時代の港湾)，昭和49年，p.389～。

図２－１　寛永時の入堀（浜町堀と吉原）



小林春吉『日本橋総覧』日本魁新聞社，昭和14年より

に難くない。その１つはもちろん水運の便であり，他は入堀の西側の元浜町や新大坂町のような商業地との結びつきである。特に橘１丁目は，図１－３のように，この堀に沿っているだけに，この影響は顕著である。それだけにまた，同じ橘町でも１丁目から４丁目までの町々では，その姿を異にさせることにもなるのであった。しかし，享保・元文の頃のこの界隈は，まだこれといった商業的基礎をもたぬ「新地」的な町で，世評でとりざたされたように，寄合茶屋の席に出入りする「踊り子」たちの多いところとして知られていたにすぎない。[16)]

それでは，この町が発展してきた江戸後期には，どんな店があったのであろうか。これについて１丁目から４丁目の各町毎に記したのが表２－１である。もちろん，これがすべてではない。「日本橋区史」にある嘉永諸問屋再興リストや旧幕引継書の「諸問屋名前帳」をベースに「江戸町づくし

16）　木村捨三『江戸名物鹿子』享保18年，p.24，及び浅草区史編纂委員会『柳橋今昔』（浅草区史風俗篇上）昭和８年，p.272～。

表２－１　橘町商店（嘉永）

橘町１丁目		2丁目		3丁目		4丁目	
米屋	大黒屋平左衛門	米屋	越前屋儀右衛門	地廻米穀問屋	田中市左衛門	米屋	能登屋市兵衛
〃	田中屋平左衛門	炭薪仲買	伊勢屋宇八*1	米屋	加賀屋源兵衛*3	〃	越後屋庄兵衛
木綿門屋	布屋京一郎	木綿門屋	伊勢屋徳右衛門	炭薪仲門	中島屋喜兵衛*4	〃	山口屋又兵衛
木綿呉服門屋	布袋屋善兵衛	木綿呉服問屋	大黒屋宗七（幸吉）	〃	河内屋久四郎	炭薪仲買	沢田屋仁兵衛*6
木綿門屋	富田屋善兵衛	〃	町田直次郎	〃	越前屋弥助*5	〃	本橋屋清人*7
呉服問屋	半田屋久蔵	〃	中村屋磯八	紺屋	吉兵衛	〃	大和屋新五郎
医師		呉服問屋	大黒屋惣七	地漉紙仲買	紙屋五郎右衛門	紺屋	善次郎
浮世絵師		〃	長谷川屋半右衛門*2	薬種問屋	大坂屋平六	紙問屋	嘉兵衛*8
		〃	水戸屋新兵衛	乾物問屋	大坂屋庄蔵	板木屋	長兵衛
		薬種問屋	井筒屋忠兵衛	紫根氷問屋	大坂屋庄助	小間物問屋	鈴木屋清兵衛
				煙管問屋	伊勢屋幸七	草履問屋	大和屋八郎兵衛
						更紗染	大坂屋太助

*1　慶應２年休業
*2　安政６年休業
*3　→加賀屋忠助
*4　安政２年休業
*5　安政４年休業
*6　→山田屋幸助
*7　慶應２年休業
*8　大黒屋佐兵衛後家後見

資料は本文及び注参照。

稿」などにあるものを勘案した主要な店である。[17]

この表は橘町の商業上からみた町の特徴をよく示して入るといってよかろう。

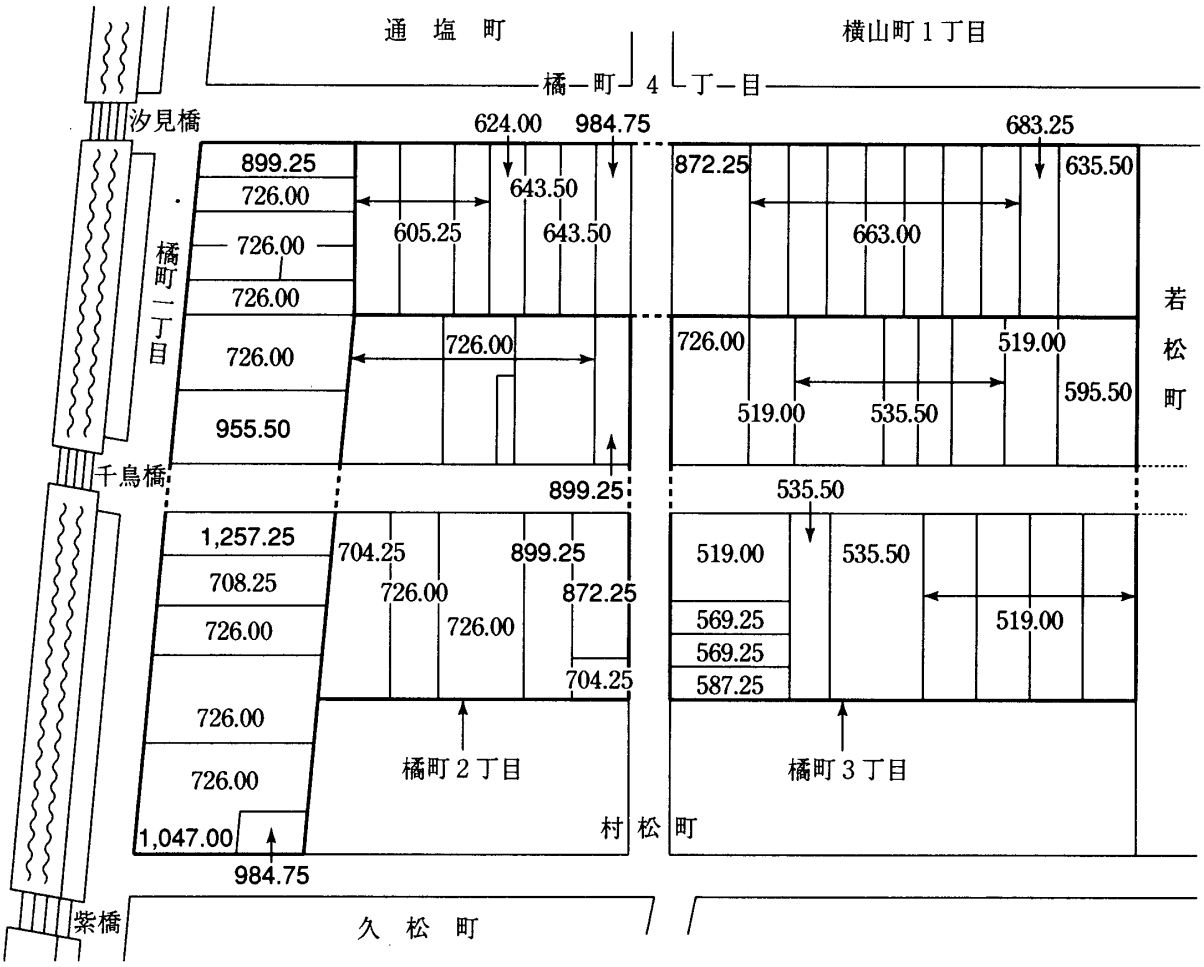
まず，同じ橘町でも，１・２丁目と３・４丁目とは店の種類が著しく異なっている。１・２丁目では木綿・呉服のような織物問屋が多いのに，３・４丁目には見当たらない。これはすでに述べた橘町のロケーションによるもので，１・２丁目がこの頃には，浜町堀の対岸の町の織物問屋街化による市場の拡大に影響され，その商業圏に入っていったことを示しているといえる。これに対して，３丁目には米や炭薪のような日用必需品以外に，地漉紙，薬種，乾物，煙管のような問屋があり，４丁目では，紙，小間物，草履の問屋があって，業種の幅が広くなってゆく。これは４丁目の北側の通りの横山町に類似している点，この商業圏に属している町といえるのではあるまいか。従って，橘町は異なる商業圏を持つ２つの地域に分けられることになる。

このことを更に地価の面からみてみたいと思う。ただ残念なことに，江戸時代のこの頃の地価を示す資料はない。著名な寛保沽券図も浜町堀以西の町や以東では横山町２丁目，村松町，久松町，若松町については「中央区沿革図集」に集録されているが，橘町については不明である。そこで，この橘町の前述のような特徴的パターンが持続し，むしろ，この傾向を強めていたと考えられる明治11年の地価があるので，これをわかり易く図１－３の図に記入した形で示してみると，図２－２のようである。

これをみると，橘町１・２丁目の方が３・４丁目よりも総じて地価が高い。１丁目は平均して

17)　日本橋区役所編纂『日本橋区史』第３冊，（区内諸問屋名前）大正５年，p.257～。旧幕引継書目録３『諸問屋名前帳　細目（一）』国立国会図書館。岸井良衛『江戸町づくし稿』青蛙房，昭和40年。

図2－2　橋町地価（100坪当円）明治11年



『東京地所明細』尚玄堂，明治11年より作成

896.96円で，2丁目は770.95円，これが3丁目になると，517.45円と低く，4丁目は679.50円で，やはり1・2丁目と3・4丁目とは著しい較差がある。これはその町々の市場価値を反映したものとみられるが，ここでもこの2つの地域は判然と特性を異にしていることを示しているといえよう。またこの図で太字の数字のように比較的高い地価をもつところがあるが，それはすでに述べたような町の背景を投影したものとみられる。1丁目の5番地が955.50円，6番地が1,257.75円と高いが，それは浜町堀に面し，かつ千鳥橋により元浜町に結ばれている道筋にあるからで，また11番地と12番地も同様に1,047円と984.75円と高値なのは，近くに紫橋があって富沢町に通じているところにあるからであろう。もちろん，町の北の通りに面したところで，汐見橋に近い1丁目1番地は899.25円であり，また橋町に入る真ん中の道の角は，4丁目でも7番地・8番地のような角地の故に984.75円，872.25円のように高く，この道の四つ辻にあたる2丁目の角地は899.25円，872.25円もしていたが，意外なのは3丁目の地価のほとんどが500円台にとどまり，4丁目では，通塩町や

横山町１丁目に道を隔ててむきあっていながら，これによって地価が高くなるということがなかったことである。こうしてみると，やはり橘町は１丁目から４丁目までの町から成っていても同質の町内ではなく，それぞれが独特の商業的風土をもっていたといわなくてはなるまい。

３．橘町をめぐる２つの商業圏

ここで橘町を特徴づけた２つの商業圏をとりあげたいと思う。まず，その第１は，橘町と浜町堀対岸の町々である。そこには北から元浜町，弥兵衛町，新大坂町という３つの町があった。今はこの更に南にあった富沢町に町名が統合されてしまったが，江戸末期から明治・大正にかけて大きく変化，発展した町々であった。

元浜町は江戸の造成初期にまだ入江に沿った町で「浜町」といわれていたが，浜町堀が開削されたとき霊厳島に代地が与えられ，このあとを元の字を冠して「元浜町」となったという。資料的にその時期は明示し得ないが，本稿１で述べた浅草御堂建設のための土地造成と軌を一にするものではなかったろうか。しかし，浅草御堂と係わりあいのあったのは，弥兵衛町と新大坂町であった。というのは，弥兵衛町（後の弥生町）は「花町」ともいい，浅草御堂のあった頃，「立花」の花屋が多くあってこの名となったといわれ，新大坂町も，起立は慶長の頃で「里俗花町と云者西本願寺横山町にありし時香花を鬻く店多くありし故云」とあるからである。[18] どうもこうみると，橘町＝立花町と同じ町名のゆえんで，浅草御堂との係りあいはここまでも及んでいるということになる。言いかえると，御堂の境内を出たところから堀を渡ったあたりに，こうした立花の店が多く，橘町１丁目はまさにこの寺寄りの「花町」ではなかったろうか。寺院が広大で，この境内には既述のように57もの末寺が入っていたから，堀をこえた対岸の町々にも立花の店が広がっていたことは想像できないこともない。しかし，これだけの寺院であれば，その宗教的影響力がこの近辺に強く作用しない筈はないであろう。とすれば，前にも私見を記したように，この立花は立花会からも説明し得るのではないか。もしこう解釈すれば，堀をこえて西側の町にも立花からの俗称をもたらすことも不思議ではない。

それでは，この町々にはどんな業種の店があったであろうか。ここでは小さな町の弥兵衛町を除き，元浜町と新大坂町のそれをみておきたい。橘町と比較するために，表２－１と同じ資料と方法で，これらの町について作成したのが表３－１である。

これでみると，橘町は元浜町や新大坂町の商業力の比ではないが，店の種類から１・２丁目が元浜町に実によく似ている。木綿・呉服のような織物問屋が多いからである。当時はまだ大門通りや

18）東京都『東京府志料』都政史料館，昭和34年，p.258。

表3－1　元浜町・新大坂町商店（嘉永）

元浜町			新大坂町		
春米屋		大黒屋金兵衛	池田米穀問屋		越後屋茂兵衛
炭薪仲買		藤丸屋庄之助	春米屋		穀屋彦次右衛門
〃		岩城屋惣兵衛	炭薪仲買		遠州屋善平次
釘鉄銅物問屋		中島屋太兵衛	〃		永岡屋佐右衛門*2
木綿呉服問屋		近江屋儀兵衛	〃		三川屋嘉助*3
〃		三河屋弥助	〃		越前屋治助*4
〃		内田屋庄兵衛	糸問屋		外村卯兵衛
〃		松坂屋藤八	〃		池上弥右衛門
〃		佐野屋長四郎	団扇問屋		上州屋重蔵
〃		升屋八郎右衛門*1	地本双紙問屋		菊屋市兵衛
〃		常陸屋惣助	紫根問屋		山田屋宗兵衛
〃		伊勢屋栄吉	べッ甲櫛簪細工	△	幸手屋栄治郎
小間物問屋		松坂屋小三郎	〃	△	山田屋幸助
地本双紙問屋		鶴屋善右衛門	繰綿問屋	△	伊勢屋又治郎
合羽装束問屋	△	市野屋太兵衛	釘鉄銅物問屋	△	銅屋仁兵衛
古手問屋	△	松坂屋治兵衛	古手問屋	△	伊勢屋又次郎
〃	△	松坂屋佐吉	呉服問屋		越前屋弥右衛門

*1 安政6年休業　*2 *3 慶應2年休業　*4 安政2年休業　　原資料表2－1と同じ
△は『江戸町づくし稿』より

人形町通り界隈は，本町通り一帯ほど特徴のある商店街ではなかった。[19] 木綿・呉服問屋にいたっては，それはやはり伝統のある町，大伝馬町であり，また通旅籠町や堀留の近辺であった。それ故に，この表の新大坂町の店々こそ，本町通りから外れた界隈の典型的な姿といってよいのである。米・炭薪・糸・呉服・古着・団扇・べっ甲櫛などの問屋の町がそれである。それだけに，同じ本町通りから外れた界隈でも，元浜町に表のように木綿呉服問屋が多く店を持っていたことは注目に値いするが，これにはいくつかの背景があったといえよう。一般的には，江戸文化の爛熟と消費市場の拡大，木綿織物の普及，地廻り経済の発展などを背景にした近江や上州からの新興問屋の進出だが，特に元浜町に多くの店が現われたのは，浜町堀という水運の利用できるロケーションと，このあたりが大伝馬町や本町通りの商業圏に属さぬ町で，開業するには二流地ながら商いがし易いということによるものではなかっただろうか。ここには木綿呉服問屋として，表にあるように，近江弥儀兵衛や三河屋（外山）弥助のような近江商人が，また上州の豪商，佐野屋（菊池）長四郎の名をみることができる。

橘町1・2丁目がこの元浜町と同じパターンを持っていたことについて，その背景は元浜町と軌

19）白石孝『日本橋界隈・織物問屋史考』文眞堂，平成6年，p.18。

を一にするといってよい。そして，明治の中頃に大門通りや人形町通り界隈が織物問屋街化すると，更にこの町に織物問屋が増え，隣接の久松町や村松町までもこの傾向を強めてゆくのであった。こうみてくると，橘町１・２丁目界隈は，元浜町から始まる織物問屋の商業史的展開の流れの中に置かれていた同じ商業圏に属する町々であったみなし得よう。

ここで橘３・４丁目に大きな影響を与えたと思われるもう１つの商業圏をとりあげておこう。本町通りとその浜町堀以東の馬喰町・横山町界隈である。

まず，本町通りを商業的に特徴づけたものは，大伝馬町１丁目の木綿問屋街である。これについては多くの文献で説明づくされているが，当時のこの街並みは，江戸風俗見聞記の「神代余波」にあるように，まさに「大伝馬町１丁目西側，木綿問屋にて，他商店の家なし，いずれも銅瓦にて霧除という物なり，遠三より上にあれど，江戸にては此１町に限れる」[20]といわれたのにも，その姿がうかがえよう。もちろん，ここに木綿問屋以外の店がないわけではなかった。茶・紙・筆墨・水油などの問屋があったが，20店にも及ぶ木綿問屋がここに集中して店を開いていたことこそこの町の特徴にほかならない。これこそ「大伝馬町といえば木綿問屋」というゆえんである。そしてここは伊勢商人の町でもあった。しかし，これから通旅籠町になると，この街は様相を一変する。表３―２は本町通りの両側にあった町々の問屋業種である。もちろんこれらの問屋は兼業しているものがかなり多い。それは関連している業種の問屋仲間に入っていないと，その分野での商いができないからである。たとえば，通旅籠町の大丸正右衛門は呉服・木綿・真綿・繰綿・蠟燭の諸問屋の仲間に入っており，また村田屋重兵衛も白粉・紅・下り傘・絵具染草に入っていた如くである。従ってこの表３―２はその町の店の数を表わすものではないが，少なくとも通旅籠町あたりからの本町通り西側の町には，日用品の様々なものの問屋が軒を並べていたということができる。しかも，通旅籠町，通油町，通塩町，横山町の店からみた街並みには，この表のように類似しているところが多い。ただ，それでも浜町堀の西と東とでは，同じような種類の問屋町でも，その姿は異なっていたのであった。すでにこれについて筆者も著書で指摘しておいたが，浜町堀を渡った東側の通塩町・横山町でめだって多いのが「小間物問屋」であった。これこそこれらの町の大きな特徴である。[21]

当時の小間物というのは，結髪用品や髪飾り類，白粉，紅のような化粧品及び半襟や帯止めのような服飾と装身具で，この他に煙草入，袋物など多種多様なものを含み，それだけに「小間物諸色問屋」といわれたが，この問屋の中には，煙草，箸，畳表，あげ笠，雨傘などのいわゆる荒物雑貨も扱われていた。それでは商業的にこの「小間物問屋」というものはどんな特徴をもっていたのだろうか。[22]

20） 斎藤彦麿『神代余波』（燕石十種第二）国書刊行会，明治40年。
21） 白石孝『江戸・明治・大正，日本橋界隈の問屋と街』文眞堂，平成９年，pp.37-38。
22） 前掲書，pp.42-43。

表3－2　横山町・馬喰町問屋業種（嘉永4年）

馬喰町　1丁目	馬喰町　2丁目	馬喰町　3丁目	馬喰町　4丁目
米穀，書物，べっ甲櫛，小間物，金物，煙草，煙草入，眼鏡，紙，薬種	米穀，書物，べっ甲櫛，薬種，鼻紙，小間物，煙管	伽羅油，煙草入，人形	傘，呉服太物，木綿，蠟燭，絵具

通塩町	横山町　1丁目	横山町　2丁目	横山町　3丁目
米穀，縄，紙，金物，煙草，根付，蠟燭，袋物，小間物，絵具，煙管，べっ甲櫛，薬種，海苔	米穀，糸物，紙，べっ甲櫛，紙，煙草，足袋，革，薬種，竹，筆墨，袋物，呉服太物，小間物，扇，煙管，人形，瀬戸物，書物，鼻紙	糸物，書物，塗物，釘鉄，鰹節，薬種，煙草入，京染，小間物，絵具，水油，煙管，下り雪踏，時計	米穀，乾物，薬，小間物，煙管，書物，糸物，煙草入，唐物，紅白粉，茶，鼻紙，眼鏡

通旅籠町	通油町
糸物，武具，べっ甲櫛，白粉紅，茶，繰綿，紙，鉄鋼，下り傘，煙草入，草履，蠟燭，菓子，真綿，呉服，小間物，苧麻，醤油，木綿	糸物，具，針，書物，べっ甲櫛，紅白粉，茶，紙，釘鉄，合羽，煙草入，蠟燭，打物，筆墨，呉服，小間物，絵具，苧麻，煙管，木綿，錫鉛，人形，竹皮

『日本橋区史』，『江戸買物独案内』，『江戸町づくし稿』より作成。
白石孝『江戸・明治・大正　日本橋界隈の問屋と街』p.36

第1は上述のように扱う商品が多種類に及ぶし，大衆品から高級品まで幅が広いので，規模の大小を問わず，ここへの参入が可能な商いであることである。小間物問屋の数が多いのもその故であるし，その盛衰も激しい。

第2は呉服問屋が殆どこれを兼業しているが，それは衣服が結髪や服飾装身具などと風俗的に一体をなしているからで，特に高級小間物は京都が本場であるだけに，「江戸店持京商人」の大呉服問屋の扱い品として「似合い品」として顧客に勧めることが可能であった。そこで，仕入資金のかかる高級小間物はどちらかというと呉服などの大問屋で扱われ，一般の大衆品は専業小間物問屋の扱うところであった。商いは専ら様々な品＝諸色に異存し，比較的中小の規模の店で営まれていた。横山町界隈の多くの小間物問屋はほぼこれにあたるものであった。

第3はその商品の性質上，材料なり商品そのものは様々な地方から搬入されてくる。そこでこの地方とつながりの強さが重要な条件になるのは当然である。それはこの界隈の小間物問屋の屋号にもよく表われている。上総屋，信濃屋，近江屋，伊勢屋，大和屋，越前屋，播磨屋など地方色豊かであるのもこのためであろう。

第4は，扱う商品が多種多様で，店によって商いに特色があるから，これが多数集まっている問屋街というのは，ここから仕入れたり，購入する者にとって甚だ便宜である。この点で通塩町から横山町にかけての本町通りの問屋街は，互いに大きなメリットを享受しあっていたに違いない。

橘町の北側の通りを隔てた町は，この通塩町や横山町1丁目の裏手にあたる。それだけに橘町3

・4丁目がこの商業圏に属していたとみられるが，裏手であるために，その補完的な町という性格を持っていたといえよう。改めて，表2－1をみれば，米や炭薪の類の問屋を主体に，薬種，乾物，煙管，紙，小間物，草履などの問屋がごく少数みられるのもそのためではなかろうか。

かくして，橘町は1・2丁目と3・4丁目と異なった商業圏を背景にした2つの町から成る特徴を持っていたのであった。

4．明治期の橘町——その変貌と町内異質化——

こうした橘町の特徴は明治になって更に強まる。そこに橘町1・2丁目と3・4丁目の異質化が進んでいったからである。

もちろん，明治に入って，この町の背景は大きく変化する。周囲の武家地の消失と新たな町の誕生であった。そして東隣の薬研堀もすでに明和の頃に大部分埋められてきたものが，残り全部が埋められて，明治5年に薬研堀町となったし，すでに述べた2つの商業圏の町も新しい時代をむかえつつあった。しかし，橘町全体としてこの変化をみせる最中にも，思わぬ災害にあわなければならなかった。それは度重なる火災である。明治6年には4丁目の紙屑商相模屋から出火し，3丁目の一部と2丁目片側が残らず焼け，明治10年にはやはり3丁目畳商林久衛方から出火，235戸が焼失，また明治13年に，これも4丁目の煎餅屋藤田藤吉方から出火して付近一帯に延焼し，2,120戸が焼失している。[23] その上，周知のように，維新不況下で世情不安による商売不振が続き，明治10年代でも，不換紙幣乱発インフレ，この収束デフレと激しい市況の起伏にさらされる始末であった。

しかし，明治20年代になると，人形町通り界隈には多くの織物問屋が続々と店を開き，元浜町はもとより新大坂町や富沢町，田所町，長谷川町は急速に織物問屋街化していった。なかでも，すでに表3－1にみたように江戸時代には呉服問屋が一店しかなかった新大坂町に，20店もの織物問屋が開業するなど，この一帯は多くの新興問屋の進出をみるのであった。当然，橘町1・2丁目にもこの傾向を同じくする。そこではもはや前述のような浜町堀の利点享受といったものを背景としたものだけではなく，織物市場の拡大と織物問屋街化という時代そのものに根ざす変化を示すものであった。明治27年，1丁目には，織物問屋が，呉服が7店，木綿4店，金巾1店，計12店，2丁目には，呉服5店，木綿4店，金巾1店，そのほか洋反物1店，計11店を数える。[24] そこで更にこうした新しい変化がどうこれらの街の姿を変えたかをみるために，明治33年におけるそれぞれの町の問屋の種類と店数を表4－1にかかげておこう。この中には明治の時代を反映した新しい業種がある。洋酒や洋傘，帽子もさることながら，当時の輸入品の金巾や洋反物で表示されているモスリ

23） 中央区立京橋図書館『中央区年表明治文化篇』。
24） 加集三平編『東京諸営業員録』加集三平，明治27年。

表4－1　橘町の商店(A)（業種別店数）

明治33年　（　）内店数

橘　町　1丁目	橘　町　2丁目
荒物卸(2)　書物卸(1)　洋酒卸(1) 洋傘卸(3)　古着質商(2)　染糸卸(3) 足袋地卸(1)　呉服太物卸(10)　木綿金巾卸(2) 洋反物卸(2)　莫大小ネル(3)　呉服仕立(1) 藍玉卸(1)　印度藍卸(1)	荒物卸(1)　煙草卸(1)　帽子卸(1) 洋傘卸(1)　絵具染料卸(1)　染糸卸(1) 足袋小売(1)　呉服太物卸(4)　木綿金巾卸(1) 綿布卸小売(2)　莫大小ネル(1)　呉服卸(2) 張物(1)　印度藍卸(1)

明治33年版『日本商工営業録』日本商工営業録発行所より作成

ン，それに莫大小（メリヤス）ネルをみることができる。と同時に，この町における織物問屋が決して小さな店ばかりではなかったことを指摘しておきたい。たとえば，石井寛治氏が織物問屋の明治31年の売上高を売上税から推定し，東京におけるランキング90位までを発表したのをみると，[25] 橘1丁目では中屋安田源蔵が15位，大黒屋石井清兵衛が28位，中村屋中村磯八は32位とかなり高位にあるし，橘2丁目の田辺正助は44位，近江屋塩野宗兵衛は61位にあり，大店のうちに入る店々であった。

一方，橘3・4丁目の背景をなしていた横山町はというと，伝統的な小間物問屋から石鹸や化粧品という舶来の新商品分野に大きく展開しつつあった。実際，明治30年代はこのような舶来品の黄金時代であり，これらの国産品の勃興期ともいうべき時代であった。その商業範囲は広く横山町から馬喰町，そして橘町にまでに及んでいた。横山町1丁目の近江屋天野源七店，2丁目の新盛堂岡島新太郎，花王堂の桑原啓造も化粧品卸商だし，馬喰町には1丁目の平尾賛平店，2丁目には化粧品・石鹸の製造卸の中でも群をぬいて成長・発展をとげた長瀬商店（後の花王石鹸）があったし，橘町にも4丁目に丸見屋三輪善兵衛店（ミツワ石鹸）があった。こうして，この界隈の小間物問屋は，従来通りの小間物も西洋小間物に，また化粧品や石鹸の類に取扱品を変えてゆき，店内に並ぶ品々が大幅に変化をみせていった。西洋小間物は「雑貨」ともいったが，洋服の付属品の釦，カフス，ネクタイピン，帽子，手提鞄などが登場し，袋物もしだいに新しいものへと移ってゆくのであった。まさにこれは小間物問屋街，横山街の変貌である。

この時代の流れの中で，橘町3・4丁目も変化をみせていった。表4－2，橘町の商店(B)をみると，この町にも帽子や香水，化粧品，靴鞄の問屋が現われているし，ビスケットの製造所もできているからである。もちろん，これ以外にも，伝統的な小間物や足袋，布団，煙管筒（きせる）や莨入金具，元結，髢などの問屋があり，その意味からすれば，この町は新旧，和洋の混ざりあった日用雑貨の問屋街になりつつあったといえるかも知れない。これは，表4－1の橘町1・2丁目と比較してわか

25）石井寛治「集散地の織物問屋と金融」（山口和雄編『日本産業金融史研究』東京大学出版会，昭和49年）第10表，pp.59-61。

表４－２　橘町の商店(B)（業種別店数）

明治33年　（　）内店数

橘　町　３丁目	橘　町　４丁目
酒醤油卸(1)　縄莚小売(1)　米屋(1) 青物乾物屋(1)　薬屋(1)　ビスケット製造(1) 帽子卸(2)　香水(1)　化粧品卸(1) 絵具染料卸(1)　紙卸小売(1)　古着卸(1) 張物(1)　袋物卸(1)　硝子器卸(1) 染物(1)　呉服布地(1)　太物卸(1) 浜縮緬(1)　呉服太物卸(1)	筆墨硯卸(1)　元結卸(1)　髢卸(1) 座布団卸(1)　象牙彫刻卸(1)　ゴム印卸(1) 鞄靴卸(1)　酒醤油卸(1)　洋酒卸(1) 油卸(1)　煙管筒卸(2)　莨入金具卸(1) パイプ卸(1)　荒物添器卸(1)　小間物化粧品卸(1) 洋小間物卸(2)　化粧品卸(2)　薪炭ヤ(1) 足袋卸(1)　袋物卸(2)　糸物卸(3) 莫大小卸(1)　綿卸(1)　張物ヤ(1)

資料表４－１(A)と同じ

表４－３　橘町町内居住地主比率（明治９年と同45年比較）

	橘町１丁目		２丁目		３丁目		４丁目	
	M９	M45	M９	M45	M９	M45	M９	M45
	人	人	人	人	人	人	人	人
A	9	14	10	11	20	21	10	10
B	8	12	10	8	17	13	13	13
C	5	11	3	3	3	3	8	10
D	3	1	7	5	14	10	5	3
E	1	0	5	5	2	3	1	0
	%	%	%	%	%	%	%	%
C/B	63	92	30	38	18	23	62	77

M９：「地主名鑑」，M45：「地籍台帳」より作成
A＝地番数，B＝地主数（同一地主は１とする）
C＝町内居住地主数，D＝町外居住地主数，E＝日本橋区外居住地主数
C/B＝町内居住地主比率

るように，全くこれらとは違った街の姿といわなくはならない。この(A)と(B)の町の違いは江戸時代から生まれ，明治後半になっても変わらず，むしろ異質性を増していったといっても過言ではない。それは２つの商業圏の時代史の反映によるものにほかならないのである。

更に，この橘町の１丁目から４丁目の各町の特性は，土地所有の状況からもみることができる。表４－３は，それぞれの町の，明治９年と明治45年における，地主のうち町内居住者の占める割合である。

Aは地番数，Bは地主数で，ただし同一地主が複数の土地を持っている場合は地主数は１と数える。Cは町内居住の地主数（町内地主），Dは町外居住の地主で，Eはそのうちで日本橋区内に住ん

でいない地主の数である。従ってC/Bはいわゆる町内居住地主比率である。

これによると，橘町1丁目と4丁目はこの町内居住地主割合が高く，1丁目では明治45年には12人の地主中，横山町1丁目の天野源七以外の11人すべてが町内居住者であった。荒物問屋石川梅吉，古着質商富永郷蔵・重次郎，木綿問屋成沢かね・中村磯八・布施栄三郎，呉服木綿問屋安田源蔵・中村治平・中村正治などである。これに対して，2丁目・3丁目はこの割合が極めて小さい。即ち，これらの町の土地の殆どは町外の者が所有していたということである。殊に，2丁目では日本橋区以外の居住者がここの土地を所有していたところが5ヶ所もあるが，明治45年では，この中に，元郡山藩主の後継者柳沢保重（芝田町）とか，滋賀の神崎郡の坊野惣兵衛や高田洋興，伊勢松坂の長井九郎左衛門などがある。3丁目の方は町外居住者地主としては，元公卿の嵯峨公勝（下谷），徳川家一門の井上正詮（下谷）などの名がみられる。またこの3丁目には町内3ヵ所を持つ町外居住地主に，矢の倉の戸田康保がいたが，これは元松本藩主の長男である。こうしてみると，土地所有者が町によってその性格を著しく異にしていたということができる。

いずれにしろ，商業史的にみる限り，橘町は起立してから1丁目から4丁目まで同質の町ではなかったし，そこに橘町の著しい特殊性があったということができよう。そして明治・大正期にこの町々の異質性は更に拡大をたどるのであった。